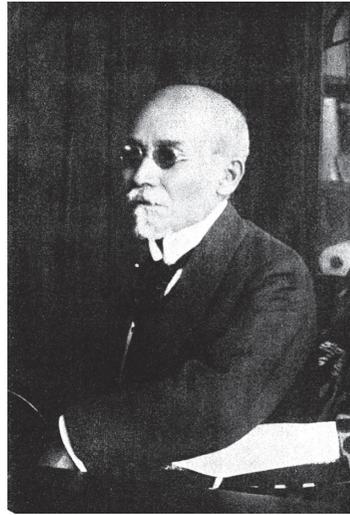


三 三根圓次郎先生略伝



三根圓次郎先生

先生は明治六年三月十日、長崎県西彼杵郡瀬戸田町檉浦郷に生まれる。家は代々大村藩の大庄屋で、亡父は壮平氏、先生はその末子である。兄姉七人あり次兄を源四郎氏と言い早くより分家する、先生はその分家に入って同家を継ぐ。

先生、幼いときより賢さは衆に抜きんでて、またすこぶる読書勉学を好み、一灯をともし、午前零時を過ぎても寝ず、そのために慈母が先生を戒めることがしばしばであった。学業成績はもとより抜群で先生が十二歳の時、小学中等科第五級より第四級に進み二ヶ月で第三級に躍進したことがあった。（当時の学制、半年で一級となった）

明治十九年私立大村尋常中学校に入り二十四年同校卒業、次いで熊本第五高等学校第一部を経て東京帝国大学文科学科に入学、明治三十年七月これを卒業する。この間常に学業優秀品行端正を賞せられる、賞状はなお先生の家に存在する。先生の文科大学に学ぶに学資は必ずしも豊かでなく、このことから芝に居住していた伯父の家に身を寄せ家庭教師等をし、また同家より本郷の大学まで徒歩で往復して一日も怠らず心身を鍛練した。先生の標語、健、研、儉は先生

がこれを少壮より実践躬行して変わらなかったのである。

今若い俊才は実社会に直面した。先生の資質と先生の努力をもってすると中央の哲学者として学界思想界に貢献し、華々しい名声が当然のように至ることも期して待つことができたに違いない。しかし先生はあえて地味な一教育者となつた。思うに先生の国士的信念が牢固であることからそうしたのである。また、思うに先生が大学に入った明治二十七年夏は日清戦争が勃発した時である。先生が大学を出た明治三十年は一方では三国干渉に恨みを呑んだ青年日本の臥薪嘗胆の時で、他方では立憲政治が確立し産業・文化はますます日々進んでいる時であり、独立不羈の愛国者の自覚と進歩に対する確固たる信念とは日本全国とりわけ青年層を捉えていた。しかし、この間往々にして固陋である排外保守に流れる者があり、浮薄な欧化に惑溺する者があり、まさに日本の疾風怒濤の時代であつた。世の中はこのようであり、少壮学士は多少の感慨がないことはなかつた。そこで、常に国民的自覚を堅持し不断に進取的な人材を養い、そうして国家百年の基礎を築くことこそ己の天職であると、先生が熟慮の後到達して終生揺るがない信念となつた。

先生はこの天職の自覚と識見とをもって大学卒業後四ヶ月の後明治三十年十一月、教育界の第一歩を山形県立中学校教諭として踏み出し、英語科、修身科を担当する。それから同校にいること一年半、明治三十二年四月福岡県立東筑中学校に転じ、次いで同三十四年六月佐賀県立第三中学校（後唐津中学校）で校長になる。教育界に入ってわずか四年に満たずついにこの重任に就いた、その時先生年二十九、銳意校風の振興に努め少壮校長の名声はしだいに高くなつた。いること五年、明治三十九年一月佐賀中学校長に転じ、四十二年三月県立徳島中学校長に任じる。次いで大正元年十二月、先生には思い出深い山形中学校に校長として再任した。在任七年の長きに及び、先生の薫陶はあまねく生徒に浸潤し、前任諸校の生徒と同じく同校出身者もまた永く先生を敬慕して止まない。

大正七年四月、山形より県立新潟中学校長に転任する。この年高等官四等で待遇される。翌大正八年四月の頃東京において先生を某高等学校長に招聘しようとの発議があり、先生は肯んぜず、思うにその地位は制約が多くまことに自分

の信念で教育に当たるのを許さないのをおそれたこと、また教育の効果は少年教育において一層発揚せられることを信じたからである。先生の名利を軽んじ信念を重んじることはこのようであり、周りからの剛直との評価も当然である。

しかし先生をもつてしてもやはり外的勢力と伝統的因習が往々にして先生の志を妨げた、先生はこれを嘆きその抱負をいかに実現できる機会を待つ、例えばまるで良農が上田を得ようとするようだ。あたかも好機としてここに土佐中学校は創立された。これより前高知市の富豪川崎幾三郎、宇田友四郎の両氏が、維新の際英傑を輩出した土佐にして近来教育が振るわず人材が次第に凋落しようとするのを憂い、巨資を投じて新たに中学を興し大いに英才を育もうとする。元新潟県知事北川信従氏が専ら發議に参加して奔走した。その趣旨は機械的多数画一教育の弊を改め少数英才の個性長所發揮を図り将来邦家各方面の指導者であるべき基礎教育を行い、それによって郷土ならびに国家に報いようとするのであった。このようなことはもとより尋常な教育家に託すことのできる任務ではない。北川氏らはそのために校長招聘に大いに苦しんだ。たまたま氏の知友で土佐出身である中等教育界の元老に当時東京府立第一中学校長川田正激氏がいて、北川氏がこの氏に新設校長について諮った。川田氏は早くから先生を尊して已まなかったので、直ちに先生を推薦し、先生もまた快くこれを承諾した。そこで大正九年一月十四日新潟中学校を辞し同日私立土佐中学校長に就任、学校運営の全権を委ねられる。教育畑の最良農は望みうる最上の美田を得たのを喜んだ。土佐中学校は先生を得て初めて成立し、先生はここでようやく宿意を伸ばすところを得た、教育界にとって素晴らしい事であり、聖代文運の慶事というにふさわしい。

先生は、先の明治三十二年九月、東京で石原信敬氏の娘敬子と結婚した。岳父は栃木県の人、師範学校長・中等学校長を歴任して関東中等教育界の名士である。敬子夫人もまた賢夫人との名声があり、先生が新潟を辞した時先生との間に男子二人、女子三人あり、よく先生を助け子女を養育する、しかしその時不幸にして病があり、先生は心から心配したが新任務の重さを思い夫人等は東京で静養させ、単身赴任することを決めた。夫人はその後病が全く癒え今に健在である。令息令嬢ともに成人し皆先生を辱めない。

先生は、大正九年二月八日に高知に着任、直ちに学校開設に努め、同年四月十六日、本科生徒二十八名に入学を許可し、高知市帯屋町川崎氏控家を仮校舎として授業を開始する。越えて五月六日、予科入学式を挙げ第一学年生十名第二学年生十五名に入学を許可する。ここに幾多の鳳雛を育むべき土佐中学校の基礎ができた。以来先生はその瞑目の瞬間に至るまで全心身を挙げて土佐中学校に捧げた。この後知己川田正激氏が先生を自己の後任に望んだことも一度ではない、しかし先生は一顧だにせず、まして名利で先生を誘う者にはなおさらだ。

大正十一年四月、高知市外潮江村（現在市内春野町）に二階建て本校舎および寄宿舎その他付属設備竣工し、新学年よりここに移る、筆山の麓鏡川の畔に校舎が高く聳え、生徒が書を読む声が雲に響く、先生はそれを見て満足げにほえんだ。

大正十三年四月第一回四年修了生二十二名を出し、内十九名は直ちに上級学校に進む。このようなことは先生にとつてはもとより予期した成果であるが、全国中等教育界空前の成績である。この後もまた毎年このようだった。先生の理

想の一端は着々と実現の緒に就いた。

樹が高ければ風の当たりは強い。先生と学校の声望が上がるに伴いある者は軽率な誤解、ある者は根拠のない噂に雷同した非難、ある者は為にしようとする中傷が、ややもすると土佐中学校に浴びせられた。ある者は先生以下職員生徒一体となつての真摯な猛勉強に対して詰め込み教育とみなし、土佐中は生徒の体育養護に欠くとしたが、先生あえて閑せず。ある者は土佐中が智育に走つて徳育を軽んじると言うが、先生は論者の無知を憐れむのみ。ある者はまた土佐中学校生徒の少数であることをさして時代の教育普及主義に逆行した貴族主義であると非難するが、これはもとより土佐中学校創立の動機目的を知らずまたは強いてこれを曲解することからくる。一般中等教育は普通の中学校であつてもやはりよくこれを果たす、先生がなそうと思ひ創立者が先生に期待したことは通常画一教育の欠点を補ひ、特に少数精鋭の個性的指導を徹底させようとするにあつて、少しも一般中等教育施設に対立しあるいはこれを排除しようとすることではない。まるで産業界で大量生産の傍らで特に良質なものの生産を図るようなものである。だから、あたら大志を抱いて埋もれた不遇の人材を発見育成するのは、学校ならびに先生のすこぶる意を注ぎまた実現した所である。

先生の土佐中学校教育においては、奴隸的強制勉強、詰め込み主義は極力これを排撃した。土佐中学校の猛勉強はひとえに先生の熱意と職員生徒の感奮とが互いに照り映えたもので最も自主自発的なものである、強制がなくなるとすぐに消えるようなたぐいのものではない。したがつて生徒の勤勉力行は終身変わることはない第二の天性となつた。すなわち努力は体力があつて初めて恒久的になることができる、だから先生は不断に意を体力づくりに注ぐ。その一二の例を挙げると、特に体育科目時間を増し毎日少なくとも一時間はこれに充てる、また対校競技選手制度は選手養成を急い

で運動場ないし器具の選手独占に傾いてかえって一般生徒の運動を妨げやすいからこの制度を排し、広く全校生徒の運動を奨励する。

はじめ生徒の制服制定に当たって詰め襟服は発育期少年の身体に拘束が多いからゆったりした背広服を用いようとした。そのことはそれが高価なためなくなったが、やはり先生の考えを察することができる。その他先生が生徒各人に対し直接随時適切な個人健康指導を与えたことはこの考えを本誌後章の先生追憶文で実証しているはずである。

先生が徳育に努めたことはもとより言うまでもない。およそ学校における徳育の成果はまず生徒が師の恩を知るか否かによって端的に現れる。世に中学校が多いといえども土佐中学校生のように衷心より終身師を敬愛し師に感謝する者があるのを知らない。すなわち道徳は責任の自覚と意志の自律をその最根底とし、道徳教育は被教育者の人格の独立を承認尊重しこれを受取る者にはじめて可能である。世に教育家が多いといえども先生のように生徒の人格を尊重し愛し生徒の自覚自律心を喚起した者は稀である。だから校内風紀規律も生徒の自治団体である向陽会の自律を待ち、寄宿舎の日常生活は舍生に自治的に運営させ、また文房具等の公徳販売を実施し、いずれも独特の成果をあげた。勉学に自学自習を尊ぶのはもちろんで、休暇中に多量の宿題を課す等のことは絶えてない。先生が徳育の根本に培うことはこのようである。加えて先生の高潔な国士的信念と熱烈な愛をもって生徒を導く。これに導かれる生徒は理解力と感受性とが他に優れて豊かである。徳化が周密に生徒に及ぶことはまさしく必然の理で、土佐中学校の趣旨である少数英才教育の効果と必要性は特に徳育において立証された。

先生はこのように専ら力を土佐中学校に注ぎあえて中央に志がなかったが、衆望があつて毎年全国中等学校校長会議に選ばれて委員となり、盟友川田東京府立一中校長と肝胆相照らし斯界最長老としてあまねく畏敬される。

先生は、唐津中学校長在任の頃よりすでに眼疾の兆しがあり、土佐中学校来任後の寧日のない奮闘はさらにこれを悪化させ緑内障と診断される。昭和三年六月京都帝国大学付属医院で手術を受けたが予期に反してますます視力を失いほ

とんど失明に近くなった。先生は自ら読書することができなくなって長いが、常に側近の者に新刊書を読ませ、また努めて少壮職員ないし卒業生と談話し、一日も新知識の吸収拡充を怠らず、天性の記憶力はますます増大し、人は先生の頭脳の新鮮博識深遠に驚く。双眼すでに明を失い心鏡はかえって冴え明知はますます輝いた。

昭和五年八月、学校東南隅に新たに校長住宅を建築され先生はここに移る。今や先生と学校は空間的にも一体となった。先生が育てた生徒の数は漸次多くなり、早くも最高学府を終え社会の第一線に鋭鋒を現す者が続出した。先生と土佐中学校に対する社会の信頼尊敬はしたがって増し、真摯な父兄・初等教育家は競って子弟を先生に託すことを望んだ。先生が平常懐抱した東京土中会館設立の希望の実現の日も遠くないと思わせたのである。そんな時に想像できない最大の不幸は突風のように先生と学校を襲った。

昭和十年三月十八日暁、一星忽然と地に墜ちての声があった、三根先生倒れると。衆愕然としてにわかになんか信じない、それが真実と知って茫然としてどうしてよいかわからない、痛哭は肉親を失うよりもはなはだしい。急報により敬子夫人、令息徳一氏等東京より駆けつける。出身者で各地より帰校する者が相次いだ。

先生逝去の前夜、校長宅にて学校運営の事に関して客と対談し平常と異ならない。客が去ってにわかになんか脳溢血を發し翌暁突然長逝なされた。その因はすべて先生の長きに亘る教育活動、心身の酷使にあることは明らかである、また先生が倒れたのは学校の校内である、最後に語ったのは学校のことである、先生は実に身をもって教育に殉じ土佐中学校に殉じたのである。

三月二十一日、厳粛な校葬を執行する、歔唏(歔)の声は堂の各所に起こり、弔辞を捧げる者は嗚咽してその先を続けることはできない。

三月三十日、東京大森の先生自宅ですらに告別式を営み、次いで遺骸を多摩墓地に葬る。享年六十三、法諡して廣濟院釋大圓居士と号する。

昭和十七年四月、土佐中学校同窓会員一同、本山白雲氏に依頼して先生の浮彫像を製作しこれを母校校長室の窓外に建て、永遠に先生の徳を偲ぶ資として、ますます奮励努力して先生の信頼に応えることを期する。先生の形体はすでに亡いが、先生の精神は脈々と土佐中学校と教え子に在る、遺徳高風は年と共に薫る、これを仰ぐとますます高くこれを究めればさらに深い。

昭和十八年六月二十日印刷
昭和十八年六月三十日発行

〔非賣品〕

高知市春野町土佐中學校内

編集兼 発行人 **土佐中學校同窓会**

代表者 青木 勘

東京市牛込區山吹町一九八

印刷者 株式会社 宗文社印刷所

東京市牛込區山吹町一九八

印刷所 山本 禎 男